

残りの文化

曾野綾子

わたしは小説以外のことには何も積極的になつたことがないのだが、さまざまな偶然から、アフリカで働く力トリックのシスターたちに対して経済的支援をするというNGOを始めて三五年が経つた。

わたしには疑い深い性格があつて、援助のお金を出すと、自分の目でそれが使われているかどうかを自費で確かめに行かねば気が済まなくなつた。貧しい組織にお金を出すのだから、泥棒をしようという人も多いし、「査察」する土地も田舎ばかりになる。おかげでわたしは、アフリカのほんとうの僻地に入る機会ができたのである。一九九五年末から九年半勤めた日本財団でも、やがてアフリカの極貧地帯を専門に見る調査団を出すようになり、わたしが毎回その旅に初めから終わりまでつき合つた。

結果的にアフリカは、わたしにとって偉大な教師になつた。日本人は、鋪装していない大地が目の前に続くとき、どこを歩くかもわからない低いところ、砂漠なら涸川の川床を行くのが常道だ。しかしながら未開拓の土地を移動したことがないような暮らしせしていると、四駆を使っても時速二〇キロメートルもない悪路、水深のわからない川を渡る時期の選定、マラリア蚊を避ける才覚けちなゲリラまでカラシニコフだけはもつてている不気味な時代の危険を回避する

方法、など何ひとつ教えられない。

パリやロンドンで航空会社に預けた荷物は必ず目的地で出で来ると信じてお坊っちゃんお嬢ちやまが育っていた。そんな場合を予測して手荷物に必要な品を一式もつているのでまつたく不自由しなかつたのは、自衛隊からの参加者とわたしだけだったこともある。

ホテルもレストランもないところでは、食事をどうするか。考えればじつに簡単なことだ。石三個と燃料、鍋と原材料と水さえあればたちどころに煮炊きができる。アフリカでは大地のあらゆる場所がキッチンになる。

電気のないところには民主主義はない、という関係も、わたしはすぐに気がつくようになった。地球上のどこででも民主主義が可能だと信じているアメリカ人や日本人は、電気がない暮らしをしている約二〇億人分の心理がわからないのである。民主主義に代わるのは、じつに奥が深い族長支配の文化である。アメリカがイラク政策をしくじったのも、つまりは、民主主義でない残りの文化を理解しなかつたからだとわかった。救急車が無料の国、生活保護のある国など、天国の境地だ。そうした国に生まれた幸運も日本人の多くは理解しないらしい。

そのあやこ／1931年東京都生まれ。作家。1954年『遠來の客たち』が芥川賞候補となり文壇デビュー。幅広い分野で小説やエッセイを発表。一方で各種審議会委員や日本財団の会長を務めるなどの社会活動を展開。1979年ローマ法王よりヴァチカン有功十字勲章を受賞。おもな著書に『日本人が知らない世界の歩き方』(PHP研究所)『貧困の光景』(新潮社)『平和とは非凡な幸運』(講談社)など多数。



目次

JANUARY 2008
月刊みんぱく

1

- 01 エッセイ 世界へ世界から
残りの文化
曾野 綾子

- 02 特集 **ネズミ**
にくくもあり、いとおしくもあり
権永 真佐夫
アンデスで飼う
種澤 和宏
昔話とネズミ
小池 淳一

- 15 時論・新論・理想論
文化と国民国家
竹沢 尚一郎
- 16 外国人として生きる
**「単一民族国家」のなかで
華僑として生きていること**
劉 明基
- 18 地球を集める
海の仕事の映像収集
飯田 卓
- 20 生きもの博物誌
タブーの島のトビウオ漁
竹川 大介
- 22 フィールドで考える
アナ・ボトルのクジ遊び
森田 良成
- 24 開館30周年記念事業のご案内
次号予告・編集後記
- 08 モノ・グラフ
複数館の資料を一体化して企画展を作る
吉田 裕彦
- 10 地球ミュージアム紀行
資料に向き合う博物館
姫原 亮二
- 11 表紙モノ語り
ネズミの彫刻
松山 利夫
- 12 みんぱくインフォメーション
**万国津々浦々
ハバオ村の植林活動**
清水 展